

# 美妙齋美妙

内田魯庵

青空文庫



## 一 欧化熱の早産児

丁度この欧化主義の最絶頂に達して、一も西洋、二も西洋と、上下有頂天うちようてんとなつて西欧文化を高調した時、この潮流に棹さおさして極端に西洋臭い言文一致の文体を創はじめたのが忽たちまち人氣を沸騰して、一躍文壇のおおだてもの大立者となつたのは、山田美妙やまだびみようさい齋さいであつた。美妙はあたかも欧化熱の人工ふらんき孵卵器で孵化された早産児であつた。これより先き美妙齋は薩摩さつまの美少年の古い物語を歌つた新体詞を単行本として発表した。外山とやま博士一流の「死地なりに乗入る六百騎」的しよせいぶしの書生節とは違つて優艶富麗の七五調を聯なべた歌らしい歌で

あつたが、世間を動かすほどに注意を牽<sup>ひ</sup>かないでしまった。が、この詩を発表した時が十八だというから、美妙の早熟の才は推して知るべきである。

美妙齋の名が初めて世間を騒がしたのは『読売新聞』で発表した短篇「武蔵野<sup>むさしの</sup>」であつた。極めて新らしい言文一致と奥浄瑠璃<sup>おくじょうろうり</sup>の古い「おじやる」<sup>ことば</sup>詞とが巧みに調和した文章の新味が著るしく読書界を驚倒した。「美妙齋とはドンナ人だろう？」と、当時美妙齋の作を読んだものは作者の人物を揣摩<sup>しま</sup>せずにはおられなかつた。が、新聞で読んで感嘆したのはマダ一部少数者だけであつたが、越えて数月この「武蔵野」を巻軸として短篇数種を合冊した『夏木立<sup>なつこだち</sup>』が金港堂<sup>きんこうどう</sup>から出版されて美妙齋の文名が一時に忽

ち高くなつた。

丁度同時に硯友社の『我楽多文庫』が創刊された。紅葉、漣、思案と妍を競う中にも美妙の「情詩人」が一頭地を抽んで評判となつた。続いて金港堂から美妙齋を主筆とした『都之花』とが発行されて、純文芸雑誌としてのエポックを作つたので、美妙齋の名は忽ち喧伝されて、トントン拍子に一方の旗頭と成済ましてしまつた。

今日の金港堂は強弩の末魯縞を穿つ能わざる感があるが、當時は對抗するものがない大書肆であつた。その編輯に従事しその協議に与かるものは皆錚々たる第一人者であつた。然るにこの大勢力ある金港堂が一大小説雑誌を発行するに方つて如何

なる大作家でも招き得られるのに漸やっと二十歳はたちを越えたばかりの美妙を聘へいして主筆の椅子いすを与えたのは美妙の人氣が十分読者を牽ひくに足るを認めただからであろう。その頃金港堂の編輯を督ひかしていたのは先年興津おきつで孤独の羈客きかくとして隱者の生涯を終った中根香亭なかねこうていであつた。が、『都之花』については美妙が一切を主宰して香亭はただ巻尾に謡曲の註釈を載せたただけであつた。その時は明治二十一年の春であつた。

『都之花』以前に『芳譚雜誌ほうたん』とか『人情雜誌』とかいう小説雑誌があつた。が、皆戲作者げさくしやの殘党に編輯されていたので、内容も体裁も古めかしくて飽かっていた。『都の花』はあたかも世間が清新の読物に渴する時に生れたので、忽ち当時の雑誌のレコ

ードを破つて、美くしい花やかな気持の好い表紙が新らしい気分を漲みなぎらして若い読書家の心を誘そそつた。随したがつてその主筆たる美妙の位置と人気とは当時の文学青年の羨望せんぼうの中心であつた。

『我楽多文庫』は『都之花』に先んじて、硯友社の名は新時代の若い文人の集団としてその時既に読書界を騒がしていた。二者を比較すると『都の花』は羽二重はぶたえの黒紋付くろもんつきの如く、『我楽多文庫』は飛白かすりの羽織の如き等差があつた。その代りに前者はドコとなく市気があつたが、後者は微塵みじんも算盤気そろばんけがなくて自由な放縦な駄だ々だツ子こ気分を思う存分に發揮していた。ドチラにも各々長所があつてそれぞれ人気を呼んだが、美妙齋はこの二雑誌に跨またがつて、あたかも政党の領袖りょうしゅうであつて内閣の椅子に座しているような

観があつたから声望隆々として硯友社同人を圧していた。紅葉でさえが当時はなお微々として、美妙に対しては太陽の前の月ほども光らなかつた。

美妙と紅葉とは本と同じ町に育つて同じ学校に学び、或時は同じ家に同宿して同じ文学に志ざし、相共に提携して硯友社を組織した仲であつた。然るに『我楽多文庫』公刊匆々二人が忽ち手を別つてしまつたはいわゆる両雄なら聯なび立たずであつて、陽には磊らい落らくらしく見えて実は極めて狭量な神経家たる紅葉は美妙が同人に拔ぬ駈けけして一足飛びに名を成したのを余り快よく思わなかつたらしい。が、『我楽多文庫』の基礎がマダ固うまらちない中に美妙が『都之花』に趨はつて別に一旗き幟しを建て、あまつさえ自分一人が

幸運に舌鼓したつづみを打つて一つ鍋なべを突付つツツいた糟糠そうこうの仲の同人の四苦八苦の経営を余所々々よそよそしく冷やかに視みた態度と決して穩当おだやかでなかつたから、紅葉初め硯友社の同人が美妙を謀反人むほんにん扱あいしたのも万更まんざら無理ではなかつた。

が、美妙としてはその時既に『都之花』の外に『以良都女』という婦人雑誌を経営し、『女学雑誌』の特別寄書家きしよかとして毎号寄稿し、それ以外にもアチラコチラの新聞雑誌社から寄書を依頼されるという日の出の勢いであつたから、紅葉は左とに右かく他の硯友社同人と伍ごするには余りに地位が懸隔し、実際上にも糟糠の友を助けて『我楽多文庫』に寄与するだけの余裕はなかつたのだ。紅葉と乖離かいりするのは決して本意ではなかつたろうが、美妙の見識は

既にびよう眇たる硯友社の一美妙でなくて天下の美妙齋美妙であつたのだ。

## 二 初対面の印象

私が初めて美妙と音信したのは『夏木立』発行後間もなくであった。私はその中の「武蔵野」を感嘆した一人であつたから、マダ学生の貧しいポケットの中から『夏木立』をも購読し、『我楽多文庫』をも『都之花』をも愛読していた。

今から考えると幼稚な鑑賞眼が楽隊入りの異形な文章にくら眩まされたのだろうが、「武蔵野」には非常に驚嘆した。が、続いて発

表された他の諸作には余り感服しなかつた。殊に『都之花』の巻頭の呼物よびものとなつた「花車はなぐるま」は愚作であると思つた。が、偶然の機会から二、三回音信したのが縁となつて、偶々たまたま金港堂の編輯所近くへ用達しに行つた戻りに天下の人気作者を見るべく刺を通じたのがタシカ明治二十一年の十一月頃ごろであつたと思う。

応接室に通されておよそ十五分ばかりも待つてると、やがて軽い靴くつの音が聞えてスウツと扉ドアを排ひらいて現れたのは白皙無髯はくせきむぜんの美少年であつた。「私が山田美妙齋でござります」と叮嚀ていねいに会釈された時は余り若々しいので呆氣あつけに取られた。美妙が私と同齡の青年であるとは前から聞いていたが、私の蓬頭垢面ほうとうこうめんに反対ひきかえてノツペリした優男やさおとこだつたから少くも私よりは二、三歳弱としし

齡たのように見えた。が、一ト言ひこと二タ言話して見ると極めて世事せいじ

慣なれていて、物ごし態度も沈着おちつき払はらつていて二つも三つも年長としうえ

のように思えた。何を話したか忘れてしまったが、こんな色の生なまつちろ

白まい若い男があんな巧うまい文章を書くかと呆氣うまに取られた外に

は初対面の何の印象も今は残っていない。かえつて当の美妙齋よ

りはその時美妙に紹介された同席の中根香亭せいくづるの清癯せい鶴くづるのような

表々たる高人ふうぼうの風ふう 丰ぼうが今でもなお眼に残っている。香亭は幕人

であつた。亡朝の遺臣として声利を謝し聞達を求めず、『天王てんのう

寺大懺悔じだいざんげ』一冊を残した外には何の足跡をも残さないで、韜とうか

晦いして終ついに天涯の一羈客おきつとして興津げきりよの逆旅えきざくに易簣えきざくしたが、

容易ひつに匹ひつを求められない一代の高士であつた。

二度目に美妙を訪うたのは駿河台の自宅であつた。水道橋内のさいかちざか 茨坂を駿河台へ登り切つた堤際どてきわの、その頃坊城伯爵が住つていた旗本屋敷の長屋であつた。売れツ子の若い人気作者すまいの住居とは思われない古風な武者窓むしやまどの付いた頗る見窄すこぶらしい陰気な長屋であつた。(この家は最もう三十年も前に取毀とりこぼたれてしまつた。) 精々せいぜいが四室よまかそこらの家であつたが、書齋しよさいを兼ねた八畳の座敷の周囲に大小の本箱を積み重ね、ギツシリ塞つまつた和漢洋の書籍が室内を威圧していた。今考えるとそれほどの蔵書ではなかつたが、二本立ちの本箱の一つしか持つていなかつたその頃の私の眼には非常な大蔵書家であるかのように映つた。殊はこいに函入りの『源氏物語』や上シャンハイ海版の函入りの石印本せきいんなどが馬鹿に

光つて無知な書生ツぽの私を驚かした。

その頃の私は文学よりは経済に志ざしていた。が、小説は好きで新刊も旧刊もかなり広く読んでいた。外国小説も語学の研究かたがた少しは見ていた。専門小説家がドレホド広く読んでいたかは知らぬが、読書の量はそれほど負けているとは思わなかつた。が、その晩の美妙齋の談が古今東西に涉<sup>わた</sup>つてかつて聞いた事もない作家の名を五つも六つも聞かされたには我を折つて、自分よりも二つも三つも年下に見えるコンナ若々しい青年がドウしてこんなに博識かと煙<sup>けむ</sup>に巻かれて降参してしまつた。どんな話をしたか、この時の談話はスツカリ忘れてしまつたが、古今東西に涉つた博覧に煙に巻かれてしまつた事だけを記憶しておる。

### 三 得意の絶頂

その頃とくとみそほう徳富蘇峰、あさひなろくどう朝比奈碌堂、もりたしけん森田思軒の三人が新らしい文人の会合を思おも立いたつて文学会を組織した。蘇峰と碌堂とは新進第一の論客として勢望既に論壇を圧していた。思軒の名声はマダ両者に及ばなかつたが、造ぞうけい詣文章は夙つとに論壇の第一人者と推されていた。この三人が幹事となつて文壇各方面の第一流と目される名士を毎月案内して会合した。この文学会は後には次第うそに有象無象むげうを狩集めて結局文人特有の放肆乱脈ほうしに墮して二、三年後に自然的に解体したが、初めは最も選ばれたる少数者の集団であつて、

当時の私設翰林院かんりんいんを以て目されていた。美妙は実に純文学を代表して者きしゆく宿依田百川よだひやくせんと共に最初の少数集団くわわに加つていたので、白面の書生が白髯の翁と並び推された当時の美妙の人気を知るべきである。

当時徳富蘇峰の『国民之友』は政治を中心としてあまねく各方面の名士を寄書家に網羅もうらし、鬱然うつぜんとして思想壇に重きをなした雑誌界の霸王はおうであつた。この『国民之友』が特別附録として小説を載せ初めたのは従来この種の評論雑誌が漢詩文あるいは国風の外は小説その他の純粹美文を決して載せなかつた習慣を破つた破天荒の新例であつた。随つて『国民之友』の附録は著るしく読書界の興味を惹ひき、尋常小説読者以外の知識階級者の注目をも集め

て世評の焼点となった。かつこれに加えて広告に巧みな民友社が  
 商略上大袈裟おおげさに吹聴ふいちようしたから、自然この附録に載つたものは  
 大家を公認される形があつて、読書界が毎年二季のこの附録を迎  
 えるやあたかも回向院えこういんの番附を見ると同一の感があつた。その  
 文壇に重きをなしたは今の『改造』や『中央公論』の附録のよう  
 なものでなくて、皮肉な正太夫はこれを称して民友社の大家製造  
 といつた。尤ももつとこの大家製造は年々次第に粗製濫造らんぞうとなつて、  
 終には民友社の折紙おりがみが余りに權威を持たなくなつてしまつたが、  
 その初めはこの附録が文人の進士登第と認められていた。

この新例を創めたのは二十二年の春であつて、美妙の新作は春は  
 廼るのやおぼろ舎や隴の短篇と相並んで第一回の選に入つた。当時春廼舎は既

に文壇の第一人者として仰がれていたから選に入るのは少しも不思議はないが、新進年少の美妙が春廼舎と並んで推されたのは異数であった。シカモ、美妙は特にその作「蝴蝶こちよう」のための挿画さしえを註文し、普通の画をだも評論雑誌に挿そうにゆう入するは異例であるのを、扱えりに扱えつてその頃まだ看慣みなれない女の裸体画を註文して容易に容いれしめたのは、蘇峰に作家の意思を尊重する理解があつたからだが、また以て美妙の人氣が先例のない無理な註文をすらも容れしめたほど高かつたのを証する事が出来る。

が、この挿画の策略が見事に中あたつて作その物よりは美しくしい女の裸体画が公衆の非常なる好奇心を喚起した。この画は平家の若い美しくしい上じょうろう臍だんが壇うらの浦のがから遁のがれて、岸へ上つたばかりの一

糸をも掛けない裸体姿で源氏の若武者と向い合つてゐる処で、ツイこの頃も明治の裸体画の初めとして或る雑誌に写真が載せられた。今見れば何でもない拙い画であるが、好奇心から評判になると同時に道学先生の物議を醸し、一時論壇は裸体画論を盛んに戦わして甲論乙駁暫らくは止まなかつた。美妙自身もまた幼稚な裸体画論を主張して、議論が盛んになればなるほど「蝴蝶」の挿画が益々評判となつて、知るも知らざるも皆裸蝴蝶を喧伝した。この評判に蹴落されて春廼舎の洗練された新作を口にするものは殆んどなく、『国民之友』附録に対する人気を美妙が一人で背負つてしまった。が、実をいうとこの評判は美妙の作よりは省亭の拙い裸体画の成功であつたのだ。今なら当然発売禁止とな

るべきこういう下劣な裸体画を寛假した当時の内務省の役人の頭は今の官憲よりも美妙齋よりも進歩していた。S・S・S即ちお鷗うがい外の新声社派の「おも影」が『国民之友』に載つて読書界を騒がしたのはこの年の夏の第二回の特別附録の時であつて、美妙は文壇的には鷗外よりも早く、春廼舎に次いでのエポック・メーカーであつた。

一方、美妙齋が経営していた『以良都女』は、婦人雑誌としての思想上の位置こそいわもとよしはる巖本善治の『女学雑誌』に及ばなかつたが、美妙の編輯だけに頗る文学的色彩に富み、搗かてて加えて美妙の人氣が手伝つてかなりに多数の読者を吸収していた。質も量も今の雑誌と比べては話にならぬが、丁度一と頃売れた『女子文壇』

に若干の芸術趣味を加味したような相当な雑誌であつた。巖本の『女学雑誌』の素朴に引換えて極めて花やかな色彩を帯び、その寄書欄から多くの若い女の秀才を輩出した。後に美妙と結婚して蜜月の甘い陶醉が覚めない中に果敢ない悲劇の犠牲となつた田沢稲舟もまたこの寄書欄から出身した女秀才であつた。

美妙は美男であつた。ドチラかというと為永の人情本にあり  
 そうなニヤケ男であつた。言語が物柔らかで応対も巧みであつた。  
 女の好きな国文の素養があつて、歌や韻文も上手なら芝居や音  
 楽をも囃かじつていて、初対面のもを煙に巻く博覧の才弁を持つて  
 いた。その上に天下の人気を背負つて立つて、一世を空むなしうする大  
 文豪であるかのように歌いはやされていたから、当時の文学少女

の愛慕の中心となっていた。『我楽多文庫』に載った「情詩人」というは多分自分自身を主人公としたのであろうが、如何にも多恨多感な詩人らしい生活を描いたものだ。男の我々が見ると堪らなくキザで鼻持がならないもんだが、当時の若い女をゾクゾクさせた作で、キザな厭味いやみな文句を文学少女は皆暗誦あんしやうしていたもんだ。

が、美妙齋の全盛は裸蝴蝶時代が絶頂で、それから以後は次第に下り坂となった。『都之花』に載った「花車」は人気のお底かげで多少読まれたが、具眼者の間には愚作と認められていた。最も苦辛しんした労作と自からも称していた「いちご姫」は昔しの物語の焼直し染じみて根ツから面白くなかった。一時は好奇心を牽いた「お

じやる」詞も徐々鼻に附いて飽かれ出した。これに反して一方  
ことば 妙なイキサツから美妙と睨にらみ合いになつた紅葉はメキメキ売出し  
 て硯友社の勢力が漸次に文壇を席卷せっけんし、何時いつとはなしに美妙に  
 取つて代つて人気を蚕食してしまつた。文壇の寿命が如何に短か  
 いにしても美妙の人気は余りに飽氣あつけなくて線香花火のようであつ  
 た。だが、その短かい間の人気は後の紅葉よりも檣ちよぎゆう牛うしよりも  
どつぽ 独歩どつぽよりも漱石そうせきよりも、あるいは今の倉田くらたよりも武者むしやよりも花  
 々しかつた。美妙がもし裸蝴蝶時代に早世したなら必ず一代の大  
 天才なるかのように天下を挙げて痛惜哀悼を惜まなかつたろう。  
なま 生いきじいいきの生延び過ぎて最も氣の毒な末路に終つた。

## 四 人気失墜の原因

美妙齋はドウシテ人気を失墜したろう。美妙齋について実は余り多くを知っていないから、私の憶測が中るか中らないかは請合うけあわれないが、試みにその原因を数えようなら、

第一、美妙齋には限らないが、少年名を成すは第一の不幸で、美妙齋は余り早くから世間に管待もてはやされ過ぎた。詩人には随分早くから売出したのが古今珍らしくないが、美妙齋は世間に出るなり直ぐ大家となつてしまつた。二十か二十一はたちで一躍して数年以上の操觚そうこの閱歴を持つ先輩を乗越して名声を博し、文章識見共に当代の雄を以て推される耆宿きしゆくと同格に扱われた。如何に天才でも

非凡人でもこう易々やすやすとトントン拍子に成上ると勢いきい矜きよう驕きようとなり有頂天うちようてんとなるは人間の免かるべからざる弱点である。美妙齋は余りに早く大家となつたために自分をもまた余りに高く買ひ被り過ぎて少しも造詣ぞうけいに励まなかつた。自然頭の中が忽ち空乏となつて、文章上の工風くふうも構想上の進歩も行詰ゆきづまつて飽かれてしまつた。

第二、美妙齋の人気を博した第一の理由は文章上の新味であるが、この新味はこれまでの日本文には余りなかつた非情物即ち草木や動物の擬人法、例たとえば花が囁ささやいたとか犬が欠伸あくびしたとかいふような文句や、前にもいつた足利あしかが時代の「おじやる」詞ことばや「発矢はつし! ……何々」というような際立きわだつた誇張的の新らしい文調

であつたので、初めの珍らしい中こそヤンヤと喝采かつさいされたが、段々馴なれると鼻に附いて飽かれてしまった。匂いの高いものは鼻に附くようになると嘔吐むかつくほどイヤになるもんで、美妙齋の文章の新味も余り香気が高過ぎたので一時は盛んに管待もてはやされたが、その反動として今度は極端きんに嫌きらわれるようになった。

第三、美妙齋に限らず、創作家は余り評論をしない方が得策である。創作家と評論家とはおの自ずから領分が違つてゐる。二者共に長ずる少数特殊の人を除いては、創作家は評論をするとボロが出る。どういふもんだか美妙齋は評論が好きで、やたらと幼稚な評論をしては頭の貧弱を惜おしげなく露さらけ出してしまった。殊に美妙齋の生なまぬるまぬる緩い冗漫の言文一致は論難に不適當であつて、いとど薄弱なる

議論を益々力弱くさせて世間の輕侮を招くようになった。(この点においてははかつて一度もマジメな議論をした事のない紅葉は有すが繋に伶俐であつた。)

第四、美妙齋は余りに多才多能で、何でもちよつとは器用にやつてのけたので、一事の完成に全力を注がなかつた。創作もすれば評論もする、文学も論ずれば婦人も論ずる、小説の評判が悪くなるはなはると字引を作る、著述が受けなくなると算盤を持つ、甚だしいのはラムネの製造までもして損をしたというように、始終転々して一事を貫く熱心が欠けていた。文壇に乗出したそもそも初めこそ小説を生涯の使命とする意気込いきこみがあつたらしいが、人氣が去つてからは他の仕事に転々して、最後に再び文壇に舞戻つた時は

最<sup>も</sup>う時代に遅れてしまつて、口を糊<sup>のり</sup>するに忙がしくて捲<sup>けん</sup>土重<sup>どちようら</sup>来<sup>い</sup>の花を咲かせようとする意気地が抜けていた。

第五、美妙斎は人となりが偏狭で、誰とでも親密になれなかつた。かつ誠実が多少乏しかつたようである。その頃我々は大抵独身で、始終互いに往来して共に飲食する事が珍らしくなかつたが、美妙と一緒に飯を喰<sup>く</sup>つたという話を誰からも聞いた事がなかつた。勿<sup>もちろん</sup>論美妙の家で蕎麦<sup>そば</sup>一つ御馳走<sup>ごちそう</sup>になつたという人もなかつたようだ。かえつて美妙を尋ねる時は最中<sup>もなか</sup>の一と折も持つて行かないと御機嫌<sup>ごきげん</sup>が悪いというような影<sup>かげぐち</sup>口があつた。かつ、文人の集まる席へ案内されても滅多に顔を出さなかつた。尾崎と一緒に下宿して一つ鍋のものを突ツついた仲でありながら、文壇の羽振<sup>はぶり</sup>が宜<sup>よ</sup>

くなるに忽ち裏切ってしまった。二葉亭ふたばていとは親同士が同僚であつて、小学時代からの友人であつたが、中年以後は全く疎隔して音信不通であつた。文壇人とは誰とも面識があつたが、親友といふものは殆んど一人もなかつたようだ。であるから金港堂を離れて後の美妙齋は全く孤立して、誰とも交際つきあわないから随つて誰にも余り同情されないで、社会的にも私的交際にも段々存在を認められなくなつてしまつた。

第六、稲舟女史との關係については真相を判断する材料を持つていないが、無責任な新聞紙に大袈裟に伝えられるほどの不徳が美妙にあつたとは思われない。美妙にも必ず同情すべき氣の毒な事情があつたらうと思うが、平生へいせい誰とも交際わないから自然文

壇の同情が薄く、同情したいにも同情するだけの材料を持つてゐる者がなかつたから、かげ蔭にもひなた日向にも美妙のため弁疏する事が出来ないで、新聞紙の報道を半分虚伝と思いつつも暗々裡あんあんりに認める外はなかつた。実をいうと、日本のような道德的基準の低い国で美妙が犯したぐらいの恋愛過失で社会的に葬むられてしまふというのは不思議である。が、けんしゅん嶮峻あいろの隘路こいしに立つものは拳石こいしにだも躓つまずいて直ぐ千仞せんじんの底に墜おちる。人気いささが落ちて下り坂となつた時だから、責むるに足りない聊いささかの過失でも取返しの付かない意外な致命傷となつたのであろう。愛の冷却した夫婦の結合は不自然であるとか虚偽であるとかいう勝手な理窟りくつを付けて不条理極まる破縁を不人情とも没義道もぎどうとも思わず、あるいは三角や四角の恋

愛を臆面もなく手柄顔てがらがおに告白するのを少しも怪あやしまない今から考  
えると、ただこれだけで葬むられてしまったのは誠に氣の毒であ  
つた。

以上は美妙が文壇に失墜した所以ゆえんの重なる理由である。それ以  
外に幾多の遠因も近因もあろうが、畢ひつきよう竟きやうするに最後が極めて  
悲惨であつたのは自ら求めて世間や友人の同情を薄くしたため  
である。文壇が美妙そむに背そむいたのではなくて美妙が文壇に背そむいたので  
ある。

だが、ドウしてこんな風に偏小狹隘求めて世間に遠ざかるよう  
になつたかというと、美妙をこんなに偏屈に孤立を好むようにな  
らしめた所以の美妙の生立ちおいたの家庭の事情さかのほに遡らねばならないが、

美妙と交際の極めて浅かった私はこれを究むるだけの材料に不足しておる。が、美妙の生立ちには一貫した一条の悲劇的径路があったように聞いている。

## 五 美妙と紅葉との比較

美妙と紅葉とは種々の点で違っていた。第一に雅号である。美妙齋美妙と名乗った理由は知らぬが、別段説明を聞かないでも解るほど露骨であつて詩人の奥床しさを欠いておる。小説家よりは曲芸師染みて寄席のビラに書かれそうだ。紅葉山人というは青年時代に芝に住つていた因みから紅葉山の人という意味で命じた

ので、格別捻ひねくらない処に洒落の風が現われている。第二に筆跡である。美妙斎の筆蹟は定家ていかよりの極めて美くしい書風であつたが、何となく芸人披露の名弘なびろめの散らしの板下はんしたせん然として氣品に欠けていた。紅葉は蜀山しよくさんじん人を学んで、若い頃のは蜀山人以上に銜氣げんき満々としていたが、晩年はスツカリ枯れ切つて蒼勁そうけいとなつた。蜀山人から出て蜀山人よりも力があつて、何処どことなく豪快の風が現われていた。

風采からいっても、美妙は色いろ白しろな柔よわ々よわしい、ドチラかといふと少し柔氣にやけて、如何にも「詩人でございます」といったような美男であつたが、紅葉は色の浅黒い、苦にがみ走つた、スツキリと背の高い江戸前の、美男というよりは好男子という方であつた。美

妙は鯔いなの背のように光ったベラベラ着物に角帯かくおびをキチンと締め、  
イツでも頭髮あたまを奇麗に分けて安香水やすこうすいの匂いをさしていたが、紅  
葉は燻くすんだ光らない着物に絞りの兵児帯へこおびをグルグル巻いて、五分  
刈頭の紺足袋やわたぐろで八幡黒やわたぐろの鼻緒の下駄が好きであつた。万事がこ  
んな風に著るしく違つていた。

私が先ず二人の性格の相違を著るしく感じたのは初対面の印象  
であつた。美妙斎との初対面は前にもいった通りに何を訊きいても  
知らざる事なく、打てば響くように直ぐ答える博覧に驚かされた  
が、二度三度と重なるとイツデモ一つ話ばかりをしていて博覧の  
奥底が忽ち看みえ透いて来たには嫌気いやぎが挿して来た。

紅葉を尋ねたのは美妙に会つてから三、四カ月後であつた。そ

の頃紅葉は飯田町の国学院大学の横町にお祖父さんと一緒に住  
 んでいた。美妙の武者窓の長屋よりは気の利いた一軒建てであつ  
 たが、美妙が既に一人前の紳士であつたと違つて、紅葉はマダ書  
 生ツぽで三畳の書齋に納まつていた。何しろ三畳敷だから二、三  
 人座るとギツシリ詰つて身動きも出来ない位で、美妙の書齋のよ  
 うに嚇かし道具を列べる余地もなかつたし、美妙のように何でも  
 来いと頤を撫でる物識ぶりを發揮しなかつた。例えば美妙は、  
 これなら豈夫知つていまいと窃に予期して質問した西鶴につい  
 てすらも初対面の私を煙に巻くだけの批評をしたが、紅葉はこの  
 頃漸と『一代男』を読んだばかりで何が何やらサツパリ解らない、  
 女の行水している処を隣りの屋根から遠目鏡で覗いている

画なんぞあつて面白そうだが少しも解らない、『源氏』よりは難かしいもんだと率直に答えた。美妙はドイツケンスもサツカレーも鶉呑うのみにした批評をしたが、紅葉はやはり難かしくて少しも解らないといった。字引をコツコツ引いて油汗をダクダク出して考え考え読んで、なるほどコイツは巧工うめやでは少とも面白くないと言つた。美妙は学者然と取澄ましていたが紅葉は極めてザツクバランで少しも飾らなかつた。美妙の知識の領分はかなり広いようだったが、イツデモ一つ領分の中を彷徨ほうこうして同じ話ばかりしていた。紅葉はこれに反して段々と新らしい領分を開拓して、会う度たびに必ず新らしい本を読んでいて新らしい話をした。

美妙齋は少しも温か味がなかつた。何度なんたび会つても他人行儀で、

心底しんそこから胸襟きょうきんを開いて語るといふ事がなかつた。強あながち袴かましもを  
 付けた四角四面の切口きりこうじよう上じようで応接するといふわけではなかつた  
 が、態度が何となく余所々よそよそしくして、自分では打解けてるツモリ  
 だつたかも知れぬが、他ひとには何時いつでも城府じようふを設けてるように見  
 えた。紅葉はこれに反して、腹の中には鉄条網を張つて余人の闖ち  
 入んにゆうを決して許さなかつたが、表面うわばは城門を開放して靴でも草わ  
 鞋らじでも出しゆつにゆう入にゆう通り抜け勝手たるべしといふような顔をしていた。  
 それゆゑ美妙齋つきあとは何年交際つても親友となる事が難かしかつた  
 が、紅葉は初対面の時から百年の友のように打解け、戯言じようだんも  
 いえば気焰きえんも吐いて誰とでも直ぐ肝胆を照らして語り合つた。

その実、紅葉は初対面から誰でも親友扱いするが心から打解け

るのではなかった。江戸ツ子風の洒脱しやだつらしく見えて実は根ツから洒脱でなかつた。硯友社という小さな王国に立籠たてこもつて容易に人を寄せ付けなかつた。実をいつたら美妙の方がリベラルで、紅葉の方が遥はるかにオーソドキシカルであつたかも知れぬが、リベラルな美妙が人に嫌われてオーソドキシカルな紅葉がかえつて人に親したしまれたというは紅葉の社交の才すぐが勝れていたからで、文壇的には狭量偏固な鎖港攘夷党であつても、社交上には如才なく振舞つて勢力を扶植し、硯友社以外にも多数の後援を擁していた。美妙はこれに反して自分から世間を狭くして友人にも遠ざかつたから、文壇的にも社会的にも孤独無援の位置に落ちて、終ついに悲惨の生涯の幕を閉じた。

## 六 悲惨な最後

美妙の文壇生活の最高調は『都之花』時代であったが、社会生活としての最得意は平永町ひらながちように新築した頃であつたろう。駿河台の暗くらぼつたい旗本屋敷の長屋から移転したので、タシカ今の神田んだキネマの辺であつた。軒並のきなみの町家の中で目立つた相当に大きな門構えの二階建てで、間数もかなり多かつたらしい。木口きぐちは余り上等とも思わなかつたが、左とに右かく木の香かのする明るい新築だつた。今と違つてマダ操觚者そうこしやの報酬の薄かつたその頃に三十になるかならぬかの文筆労働者でこれだけの家を建築したのは左も右

くも成功者であつた。

書齋は二階であつたが、椅子テーブル式で、クローム画の額や、ブロンズや、西洋家具の古道具屋から仕入れたものをゴテゴテ列べ、何のツモリか知らぬが弾<sup>ひ</sup>けもせぬヴァイオリンが壁へ掛けてあつた。今なら文化生活で、美妙の得意はこの安価洋風装飾に現れていた。が、その頃は字書を編<sup>へん</sup>纂<sup>さん</sup>していたので文壇人としては既に一步を降り坂に踏入れていたのだ。

美妙を訪問したのは前後三、四回しかなかったが、この平永町の新居を偶然通り<sup>すが</sup>継りに尋ねたのが最後であつた。僅<sup>わず</sup>か二十分ほど話して美術学校の一年生ぐらいが作つたらしい木<sup>もく</sup>彫<sup>ちよう</sup>の牛を見せられたが、それぎり美妙とは会わなかつた。自分ばかりじゃ

ない、その頃から以後は美妙が時折寄稿した雑誌の編輯者以外には美妙と往来したものは殆んどなかつたろう。

それでも稲舟と結婚した時は兩人連名で益々御愛顧を願うといふような開業の引札然たる活版摺の通知を交友間に配つた。が、新婚のお祝いをする違がない中に最う二人の恋の破綻が新聞で剔抉された。それから以来はラムネを作つて損をしたとか、公園芸妓を引入れたとかいうような面白くない風説を新聞の三面で聞くばかりで、文壇人としての消息はまるきり絶えてしまった。それから二、三年経つてから復たポツポツと美妙の名が低級な雑誌に見え出して、そういう雑誌の発行者や編輯者の口から噂を聞く事があつたが、お情に原稿を買つてやるといふような口吻で美

妙の気の毒な境遇が想像された。書いたものもまた色も香も艶もつや生氣もない萎れた花の憐れさを思わせるようなものばかりだった。二葉亭が没した時、諸家の追懷談を集めた追悼録を作ろうとして少年時代の友たる美妙齋へも寄稿を依頼した。その時の美妙の返事は敗残者の卑下した文体で、勝誇った寵児ちようじのプライドに充ちた昔の面影は微塵も見られないで惻隱そくいんに堪えられなかった。

それから一、二年経つてからであろう、美妙の訃ふの伝わつたのは。最後の隠れ家は駒込こまごめの伝中辺だと聞いたが、丁度旅行していたし、十何年間もまるで音信不通であつたし、それ以前とても親友というほどの関係でなかつたから葬儀に行かなかつたが、後に聞くと送棺者がただ僅かに三、四人だつたそうだ。自ら世を狭

くしたのだとはいえ、誠に気の毒な最後であつた。

それから数月经つて聞いた咄はなしだが、最後は石橋思案いしばししあんと丸岡まるおか

九華きゆうかが専ら世話をしたそうもつぱだ。いよいよ重体となつてから、九

華はシユークリームが美妙の大好物であると聞いて見舞に一と折  
持つて行つた。美妙は大変喜んだので、家人も厚く感謝して大切  
にし、病人の外は子供にさえも手をつけさせなかつたそうかびで、  
の生はえたシユークリームが臨終の枕頭まくらもとに残つていたそうかだ。

日本の言文一致の先駆者（あるいは創始者）として文壇の風雲を  
捲起まきおこした一代の才人の終焉しゆうえんとして何たる悲惨の逸事である

う。こういう悲惨な運命を速まねいたのは畢竟美妙自身の罪であつた  
が、身から出た錆さびであつたにしても、日本の新文体の創始者に対

して天才の一失を寛容しなかった社会は実に残忍である。

(大正十三年九月補修再録)

# 青空文庫情報

底本：「新編 思い出す人々」岩波文庫、岩波書店

1994（平成6）年2月16日第1刷発行

2008（平成20）年7月10日第3刷発行

底本の親本：「思ひ出す人々」春秋社

1925（大正14）年6月初版発行

初出：「きのふけふ」博文館

1916（大正5）年3月

※初出時の表題は「山田美妙」です。

入力：川山隆

校正：門田裕志

2014年7月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 美妙斎美妙

内田魯庵

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>